

18	豊田	豊田市立大沼小学校	ナカノフウナ	
			氏名 中野楓菜	
分科会番号		8	分科会名	音楽教育

研究題目 思いや意図をもち、友達と関わり合いながら音楽表現を深める子の育成
 — 3・4年複式「日本の音楽のよさ発見！」の学習を通して —

研究要項

1 はじめに

本学級は3・4年の複式学級である。児童は音楽の授業に前向きに取り組んでおり、常時活動のリズムワークで、リズムにのって手拍子を打ったり、友達と楽しくリズム遊びをしたりしている。「歌声のひびきを感じ取ろう」の学習では、優しく美しい曲想に浸り、曲想を生かして歌おうとする様子が見られた。また、音楽を聴いて聴き取ったことや感じ取ったことを素直に発言し、音楽を味わうことができる。一方で、自分が言うことで満足してしまい、友達の意見を聞いてつなげたり、考えを深めたりすることができていないと感じる。また、楽しく活動することはできても、「さらによくしよう」と音楽表現をより工夫することについては不十分である。

学習指導要領には、「音を音楽へと構成することを通してどのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつこと」とある。旋律づくりでは、「このような音楽をこのような構成にしたい」という考えをもち、音で試しながら表現を工夫し、思いや意図を膨らませられるようにすることが大切である。

本校は地域に伝わる大沼雅楽をクラブと総合的な学習の時間に3年生以上で行っており、音楽の授業以外で音楽活動を行う機会が多い。子どもたちは低学年のころから上級生が演奏する姿を見て雅楽に憧れをもっており、雅楽についてアンケート調査を行ったところ、12人中10人が「雅楽の練習が好き」、12人全員が「もっと上手になりたい」と思っていることが分かった。

そこで、子どもたちの興味のある雅楽を取り入れながら、「日本の音楽でつながろう」を用いて学習しようと考えた。音楽の授業における旋律づくりなどの活動を通して、自己の思いや意図をもち、友達と関わり合いながら音楽のよさや面白さに気づき、旋律づくりをさらに工夫する力を高めたいと願い本研究に取り組んだ。

2 めざす子ども像

思いや意図をもち、友達と関わり合いながら音楽表現を深める子

3 仮説と手立て

仮説1 子どもたち自身が「やってみたい」「最後まで頑張って考えたい」という願いをもてば、実現するために具体的な思いや意図をもち音楽表現を深めることができるだろう。

手立て① 大沼雅楽を題材とした単元構成

子どもたちになじみのある雅楽の音階を使って雅楽の楽譜で旋律づくりをすることで意欲を高め、「楽しい3・4年雅楽発表会」というゴールを意識して学習に取り組めるようにする。

手立て② 旋律づくりのためのイメージの設定とワークシートによる視覚支援

具体的なイメージをもち、思いや意図をもってそのイメージを旋律に表すことができるように、日本の風景や生き物など旋律の発想の補助となるようなテーマを教師が提示するようにする。また、旋律づくりで作成した音の動きや高低が視覚的に分かるようにワークシートを工夫する。

仮説2 グループでテーマを決めて創作活動する場を設定すれば、友達と進んで関わり合いながら旋律づくりをすることができるだろう。

手立て① 関わり合って考える場の設定

関わり合いを大事にするために、グループで考える必要性のある条件をつけた旋律づくりの活動を設定する。

仮説3 音楽の技能や表現力を高めることができれば、どの子も自信をもって友達に考えを伝えることができるだろう。

手立て① 常時活動を通した音楽の要素の理解

自信をもって自分の考えを友達に伝えられるように、常時活動を工夫し、音楽の感じを表す言葉を増やしたり、基礎的な技能を身に付けたりする。

4 抽出児童について

A児の実態（3年生）	目指す姿
○音楽の基本的な技能を身に付けている。 ○音楽を聴いて聴き取ったことや感じ取ったことを自信をもって友達に発表することができる。 △間違えずにできれば満足してしまい、音楽をさらによくしたいと工夫をすることは不十分である。 △自分の意見を伝えたら満足してしまい、友達の話を聞いてさらに深めようとする場面は少ない。	題材にじっくり向き合いながら、具体的なイメージをもち、「さらによくしたい」という思いをもって旋律づくりをすることができる。 友達のつくった音楽を聴いて、よさや面白さを見付けたり、友達と一緒に旋律をつくったりすることで、友達と関わり合いながら旋律をつくる楽しさを感じることができる。

5 実践と考察

(1) 子どもたちになじみの深い「大沼雅楽」との関連（仮説1手立て①の実践）

旋律づくりの学習では、教科書の「さくら さくら」の都節音階(ミファラシドミ)から授業をスタートした。子どもたちはつくった旋律を「夜桜みたいだね」、「満開の桜が頭に浮かんだよ」など、桜のイメージを膨らませながら互いの作品を鑑賞し、旋律づくりの魅力を感じるようになっていた。そこで、発展的に子どもたちになじみのある雅楽の平調の音階（ミ#ファラシレミ）を取り入れた活動に進みたいと考えた。校長による笙の伴奏に合わせて教師が雅楽の音階でつくった旋律を箏で演奏した。中には、雅楽の時間に演奏している「越殿楽」の音が使われていることに気付いていた子もいた。雅楽の音階でも旋律づくりができることを知り、A児は「自分たちも先生みたいに音楽をつくってみたい」「作った音楽をみんなに聴かせたい」という思いをもった。

「みんながつくる音楽に名前をつけようか。どんな名前にする？」という教師の問いかけに、A児は「『楽しい雅楽』にしたい」と発言した。意欲を高めたA児の意見が取り入れられ、「楽しい3・4年雅楽発表会」という名前で最後は全校のみんなに発表しようということになった。単元の計画を掲示し、授業の初めに「楽しい3・4年雅楽発表会」をつくるために今日は何をするかを常に確認することで、ゴールを意識して学習に取り組むことができた。

このように、子どもたちの好きな「大沼雅楽」と関連させて、題材に興味をもたせ、全校への発表というゴールを設定したことで、単元を通して意欲の高まりがあったと言える。

(2) イメージに合うような旋律づくり（仮説1手立て②の実践）

どんな旋律をつくりたいか、より明確な思いをもつために、日本の風景や生き物を音楽で表現することにした。海、蝶など、動きがあり、旋律の音の動きにつなげやすい材料を用意した。また、旋律のリズムは同じリズムで統一し、音の高低のイメージをもちながら自分で作るということにした。【資料1】視覚的に音の動きや高低差を捉えたり、様々なパターンを試したりできるように、旋律づくりのワークシートは、マグネットで音を貼り付ける形にした。【資料2】縦に並んでいる音名は「越殿楽」の音階である。A児は「竜」のイメージを選び、「飛んでいく竜」を旋律で表現したいという思いをもった。テーマを設定したことで、「竜が上に行ったり下に行ったりする感じ」というイメージをもち、上がったたり下がったりする旋律をつくろうとしていた。【資料3】このことから、旋律のイメージを設定することは児童が思いや意図をもって旋律づくりをするのに有効だったと考えられる。

【資料 1】 旋律づくりのリズム



【資料 2】

【資料2】
A児が竜をイメージしてつくった旋
律のワークシート



【資料 3】

A 児：「飛んでいく竜」に決めたよ。

教師：動きはどんな感じ？

A 児：上に行ったり下に行ったりしている感じ（つくった旋律を指差しながら）。（2つ目の音はミより）レの方がいいかな。

～略～

A 児：もうちょっと続きがあったらもっと上がっていきたい。
(箏で旋律を演奏し、確かめる。)

(旋律づくり 授業記録より)

③ 旋律をつなぐためにグループで関わり合って考える場の設定（仮説2手立て①の実践）

自分のイメージに合った2小節の旋律を個人で考えた後、3人グループでそれぞれの旋律をつなげて全部で8小節の旋律をつくる活動を行った。テーマを明確にし、「くり返し」を入れて8小節の曲にすることを条件にしたことで、グループで話し合う必要性が生まれた。また、話し合ったことを可視化できるようにホワイトボードに楽譜を掲示しながら活動を行った。【資料4】以上のことからグループの話し合いは常に活発であった。

【資料4】A 児のグループがつなげてつくった旋律



グループには必ず3年生と4年生が入るように構成した。そして、友達の意見を踏まえて自分の考えを深めることが苦手なA児と、周りの意見を大切にしながらグループをまとめていくのが得意な4年のB児を意図的に同じグループにした。A児の班は4年生のB児が中心になって考えた。【資料5】のように、A児はB児の問いかけに対し、「ミからミで上がるからそっちがいい。」と、音と音のつながりを意識して考えを伝える様子が見られた。

【資料5】

B児：最初どれがいい？上がったり下がったりがいい？（A児とB児の旋律は）始めの部分が似てる。

A児：（B児→A児の順につなげると）ミからミで上がるからそっちがいい。

～略～

教師：上下に飛んだ後、どうする？

A児：下がっていく竜。下がって自分のすみかへ戻る。

（グループ活動 授業記録より 抜粋）

以上のことから、旋律づくりにグループで関わり合って考える必要性をもたせたため、A児は、友達と積極的に関わりながら旋律づくりに取り組むことができたことが分かる。

(4) 自信をもって思いを伝えるための常時活動（仮説3手立て①の実践）

単元を通して自信をもって表現したり思いを伝えたりできるように、4つの常時活動を取り入れることで音楽の要素や基礎的なリズム打ちの技能を積み重ねた。

表現力を高めるために、①「タンブリンで音づくり」②「5分間鑑賞」を行った。①では、元気な音や穏やかな音などさまざまな音を作る活動を行い、タンブリンの鳴らし方による音の表情の違いに気付くことができた。

②では「動物の謝肉祭」などの、イメージが湧きやすい短い音楽を鑑賞し、曲の感じを言葉で表現した。

A児はグループでつくった音楽から感じたことを「なめらかな竜みたい」と表現していた。【資料6】

①「タンブリンで音作り」と②「5分間鑑賞」の2つの活動を行うことで、自分で感じた音楽の表情を言葉で表し、旋律づくりやグループでの話し合いに生かすことにつながったと考えることができる。

そして、技能を高めるために、③「リズムトレーニング」④「箏練習」を行った。③では旋律づくりで用いるリズムのリズムトレーニングを行った。旋律で用いるリズム【資料1】が子どもたちに定着していないという実態から、リズムワークで使用するリズムに合わせて体を動かすことを繰り返すことによって、定着を図った。【資料7】また、④により箏に触れる時間を多く取り、無理なく箏で演奏ができるようにした。箏を演奏するときには学習用タブレットで録音をし、リズムや演奏が正しいか聴き合う姿も見られ、子どもたち同士で技能を向上させていくことができた。

【資料6】

グループでの旋律づくりのA児の振り返り

B児	C児	ときょうりふして
せん	の	つながり
く	で	た
な	め	か
な	め	か

【資料7】

リズムに合わせて体を動かすA児たち



6 成果と課題

(1) 仮説 1 について

単元の最後には、全校に向けて「楽しい 3・4 年雅楽発表会」を行った。A 児は、「どんな発表会にしたいか」について話し合いをしたとき、「お客さんが自分たちの旋律をきれいだなと感じて楽しめるようにしたい」と発言した。このように A 児が明確な思いをもって学習に臨んでいたことから、「楽しい 3・4 年雅楽」の旋律をつくり、学校の人々に聴かせるというゴールを意識して、単元を通して取り組むことができたことが分かる。上手に演奏する上級生を見て、雅楽に憧れをもっていた A 児は、雅楽の音階を使うことで前向きに学習に取り組むことができたと言える。

また、「できた」とすぐに満足してしまうことが多い A 児だったが、イメージを設定して旋律づくりをすることで、納得のいくイメージを表現するために音を試したり確かめたりしながら粘り強く考える姿が見られた。

手立て①と手立て②が有効であったことから、仮説 1 は妥当であったと言える。

(2) 仮説 2 について

グループで話し合う必要性のある課題を設定したことで、グループで関わり合いながら取り組むことができた。

【資料 9】にあるように、A 児はグループの友達と協力したことで、旋律をつくることができた実感している。さらに、「4 年生の B 児が A 児の考えを聞き出してくれたから旋律ができた」と記述している。(赤線部分) このことから、意図的に作ったグループの中で B 児の働きかけにより友達と関わり合って考えたことで、A 児のイメージに合った納得のいく旋律ができたと感じていることが伺える。手立て①が有効であったことから、仮説 2 は妥当であったと言える。

(3) 仮説 3 について

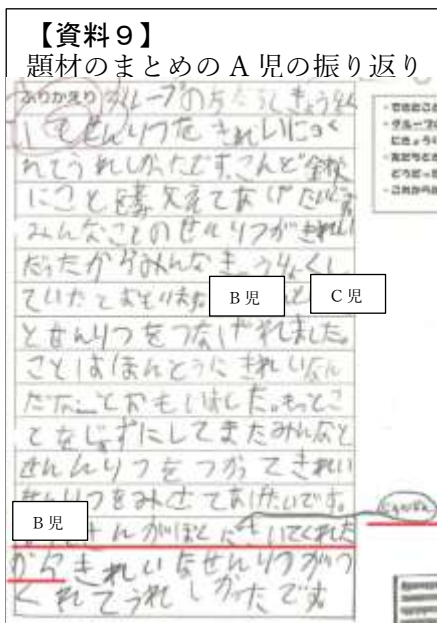
常時活動を行ったことで、音楽の感じを言葉で表現したり、旋律づくりで用いるリズムを身に付けたりと、少しずつ必要な力を高めることができた。基礎的な力を身に付けたことが、自信をもってグループ活動に参加し、友達に思いを伝えることにつながった。また、リズムトレーニングでリズムを習得したことで、旋律づくりで実際に弾いて試しながら考えることができた。手立て①が有効であったことから、仮説 3 は妥当であったと言える。

(4) 今後の課題

毎時間の振り返りでは、課題にじっくりと取り組んだことで達成感を得ている様子が伺えた。一方で、「きれいなせんりつ」「すてきなアイデア」のように、言語表現が抽象的になる子も少なくなく、具体的に伝えることに課題が残った。音楽の言葉を使って、聴き取ったことや感じ取ったことを話したり書いたりすることができるよう、引き続き常時活動を行ったり、ワードリストを提示したりしていきたい。

旋律づくりの活動では、イメージや旋律で用いる音の選択肢を教師が提示したことで、どの子も安心して旋律づくりに取り組むことができた。一方で、用いる音が制限されていたために、似たような旋律になってしまった。この学習を通して旋律づくりの技能を高めることができた今だからこそ、児童の自由なイメージで、音の選択肢の幅をより広げて音楽づくりに取り組んでいきたい。

また、グループで関わり合って考える力については、他教科での取り組みも重要である。他教科でも友達と関わって考える場面を設定し、継続的に取り組んでいきたい。



7 単元構想図

